＜オンライン教学講座「撰時抄」③　参考資料＞

◎勝利の経典「御書」に学ぶ

闘諍言訟･白法隠没という法滅の危機を迎える「第五の五百歳」とは､法華経が「閻浮提」に広宣流布すべき「時」にほかならない。すなわち「世界広宣流布の時」なのです。

薬王品には「悪魔・魔民等に広宣流布を断絶させてはならない」とあります。末法において迎える世界広宣流布の時においては、あらゆる魔性と戦って勝っていかねばならないと命じられているのです。

法滅の末法を、万人成仏・世界広宣流布の時へと転ずる力は、この「魔性と戦う法華経の行者」の実践にあります。

あらゆる魔性に打ち勝って世界広宣流布の源流を開く法華経の行者の実践を、現実に不惜身命で行ってこられたのが､大聖人御自身であられます。そのことを､この「撰時抄」では、力強く宣言なされています。

「万人の成仏」といっても、言葉だけでは一人の成仏さえも実現できません。理念や理想にとどまっていては、まだ「広宣流布の前進」とは言えない。

法華経の理念・理想を知悉（ちしつ）する先覚者が、その実現を妨げる障壁を一つ一つ乗り越える「行動」に打って出る。その時こそ、初めて現実における広宣流布の一歩前進があります。

（「大白蓮華」2010 年 6 月号 47 ページ）

◎勝利の経典「御書」に学ぶ

大聖人の慈眼（じげん）は、まずは誰よりも、知らないうちに謗法の悪に染められていく民衆の救済に向けられていた。つまり「民衆仏教」を志向されていた。これは、万人の成仏の理想を実現しゆく広宣流布の戦いの真髄であると拝されます。

国主や宗教者も、本来は、民衆の幸福のために奉仕しなければならない。しかし、大聖人のみが、真の民衆救済の戦いをなされている。その意味から、大聖人は、国主の父母であり、宗教者たちの師範であり、主君であると仰せなのです。

(中略)

大聖人は、末法の時における仏教のあるべき姿は民衆仏教であらねばならないと考えておられたと拝されます。ゆえに、国主への諫暁に際しては、民衆と国土を護るための宗教・信仰という考え方を示されて意識変革を迫られた。宗教界に対しては、国主・権力者との癒着を厳しく批判なされた。これが大聖人の「立正安国」の実践であられたのです。

（「大白蓮華」2010 年 6 月号 53 ページ）